

# ランチ

金塚悦子

## プロローグ

小学一年生の女の子四人が舞台真ん中にいる。

みどり「(こ)ど(こ)？」

更羅「ママに連れてこられた」

夏子「どうしてこんな服きてるの？」

蛍子「・・・全然わかんない」

学長の声が聞こえてくる。

学長の声「皆さん、伝統あるわが学園にようこそ！皆さんは大きな倍率を勝ち抜いて入学を果たした優秀な生徒さんです！

女性である皆さんはいずれ伴侶に出会い、家庭を作り、子供を育てる使命を持っています。良い妻、良い母であれ！

そして人生において、自由を勝ち取り、社会に対して責任をします。自由と責任、その二つを心に強く持ち、この学園で学んでまいりましょう！」

## 第一場

音楽が聞こえ始め、暗転。音楽たかまり照明フェードイン  
椅子周りの照明が明るくなる。オーナーシェフの独白が流れる。

シェフ「・・・来ないつもりでいました

でもやはりいてもたってもいられなくなった。3日後にこの店は取り壊されるのです。影も形も無くなるのです・・・思い起こせばそう・・・昭和41年、私は3年間のパリの絵画留学を終えて帰国しました。当時の日本は高度成長の真っただ中。つい2年前に東京オリンピック、様々に新しい風俗や娯楽が誕生していて、まるで日本を異国のように感じ、驚いたものです・・・とりあえず個展をおえると、私はたまたまなくフランスの食事が食べたくなくなった。

その頃の銀座のマキシム、帝国ホテル、オータニにオークラ・・・妙に格式ばっていて、しかしその味はまったく違うのです。失望の連続でした。あの小粋で洒脱なパリの味のかけ

らないのです。

高い金を出しても食べたいものが食べられないなら、ふと自分でやってみよう、と思ったのです。フランスの友人のお陰で食材はなんとか調達できたのですが、料理人のなんとたるかもわかってない私は、一から修行をはじめましたが、全く苦勞の連続。

肝心の絵からはいつの間にか遠く遠ざかってしまいました・・・

それでも昭和43年、理想ともいえる伯爵邸で経営ができる事になり夢は実現しました。会員制、マスコミにもでずに始めた店でしたが、ロコミでどんどんお客様は広がっていききました。それも美意識のあるフランスの料理を本当にわかっているお客様たちでした。そう！料理は受け入れられたのです！嬉しかった。本当に嬉しかった！

・・・そう、その頃です・・・ランチを始めました」。

独白中に、ギャルソンが場を整えている。

スライド、または看板に文字。

「1972年（昭和47年）

フレンチレストラン、ル・ポア」

照明「N

ベランダの向こうには木々。美しいテーブルや椅子。

一人座っているのは蛸子。清楚な服装。

みどり、ダイニングの外に姿をみせる。当時流行のミニスカート

カート

みどりの声「す、すみません！ここはレストラン『ル・ポア』ですか？」

シェフの声

シェフ「さようびごいます」



蛭子「ああ、例の三歳神話ね」

夏子「母親と離れた不安感がトラウマとなり、それはやがて思春期の問題行動につながっていき……」

みどり「へーっ」

夏子「その母親との一体感が確固たる人間性を築く……」

だって。でもそんな事言ったら、あの子が三歳になるまで、私は美容院も歯医者もいけないじゃない」

蛭子「保育園に預けて働いている人もいるでしょ」

夏子「学校の先生に看護婦さん、美容師さん。ごくごく一部の  
人よ」

みどり「でも外国映画じゃ、よくベビーシッターとかやとって、

夫婦でパーティーとかいってるじゃない」

夏子「とんでもないわよ。日本じゃまだまだ。そんな事絶対許され  
ないわよ」

蛭子「まどかちゃん、大きくなった？」

夏子「やつと六ヶ月。でももうニコッて笑うの。その瞬間周り

の世界も輝きだす。信じられない。半年前まで私の体の中  
にいたのよ。人間ってすごい……!」

みどり「ああ、わかった。わかった。今日はそののろけ話につきるわ  
ね」

夏子「ねー遊びにおいでよー。皆に見てもらいたくてたまらない」

みどり「はい。はい」

蛭子「それより夏子。本当に三千円でいいの？」

夏子「ここはね会員制で皇族もお忍びでくるんですって。彼が教え  
てくれたのよ」

みどり「ってことは大蔵省ご用達？」

夏子「私、どうしても四人でここにきたかったの。更羅はまだ？」

みどり「劇団の稽古で少し遅くなるかもって」

夏子「そう、じゃあとにかく座りましょう」

三人、椅子に坐る。

夏子「すみません！もう始めて頂いてよろしいですか？」

シェフ「かしこまりました」。

今日のお昼のコースは前菜は生うにのジュレ、エストラゴン入り。  
メインが豚肉のリエットに鯛のポワレ、カエルのビネガーソース。

デザートにはフォンデンシヨコラをご用意させていただきます。」

蛭子「えっ？カ、カエル!？」

夏子「・・・フォンデン・・・シヨコラ？」

みどり「意味わかる？」

蛭子「・・・全然」

夏子「大丈夫よ。食前酒をお願い」

軽い音楽。ギャルソンがグラスを渡す。

全員「乾杯!」

夏子「みどり、就職きまったんだって」

みどり「・・・まあね。まさかこの年で就職とは・・・」

蛭子「みどりもいよいよOLか」

みどり「やめてよ。二十五まで二年ある。それまでには結婚してみせるわ」

蛭子「もう!せっかくあんな大手の建築会社に入れたのに」

みどり「私は絶対結婚したいの。大学三年の時からお見合いしまくったのに、皆駄目。ああ、夏子はいいわね。憧れの恋愛結婚」

蛭子「熱烈な恋愛の相手が東大卒の大蔵省キャリアなんて、運が良すぎるわよ」

夏子「たまたま入ったサークルで知り会ったのよ。瞬間ピンときたの。私はこの人と会うために生まれてきたんだ。結婚するんだって」

蛭子「もう!聞いたわよ。何度も何度も。耳にたこができちゃうくらい」

夏子「あら。大変失礼しました」

みどり「誰だって本当は大恋愛で結婚したいのよ。でもそうはいかないから、こうやって必死でしたくもないお見合いしてるんですよ。二十四歳十一か月までに。式をあげるの。絶対に」

夏子「私はみどりが羨ましい。OLって少し憧れてたもの」

みどり「OLっていったって、要するにお茶くみよ。向こうも四大卒って使いにくいみたい。・・・でも一人だけ素敵な先輩がいるのよ。国立大を出てる社長秘書なの。私たちはへんな制服

着せられてるじゃない？でも彼女だけはいつもすごいセンスのいいスーツをキリッと着ちゃって。タイプも英会話もすごい出来るの。もし結婚できなかつたら・彼女を目指すわ」

夏子「素敵！おけいは、どうなの？」

蛍子「あいかわらずよ」

夏子「お兄様の病名、はっきりした？」

蛍子「今の医学じゃわからないんですって」

みどり「でもどうしておけいが面倒みるの。看護婦さんだって雇えるでしょ」。

蛍子「私が好きでやってるのよ。母を早くに亡くして兄と二人でやってきた。他人に託す事なんて出来ないの」

みどり「そうかもしれないけど」

蛍子「私は特別なのよ。私の事は気にしないで。さ、始めましょー！」

夏子「・・・そうね・・・じゃ頂きます」

みどり「・・・な、なにこれ！」

夏子「お、おいしいー！」

みどり「・・・こんなおいしいもの、はじめて！」

蛍子「・・・これが生うにのジュレね」

みどり「エストラゴンソースってやつか」

更羅が登場。当時の最前衛のヒッピー調の服装。  
驚く三人。

更羅「なにここ？遠いのね・・・探しちゃった」

夏子・みどり・蛍子「更羅！」

バッグから煙草を出して、火をつけようとするがつかないので大げさにため息

更羅「ああ、疲れた」

夏子「・・・なんか、しばらく会わないうちに随分変わったのね」

みどり「鼻から煙だしちゃって」

蛍子「そのサングラス、どしたの？全然似合っていないわよ」

更羅、じっと三人を見つめる。

更羅「・・・それがそのランチ、ランチってやつ？」

夏子「そうよ。フルコースでデザートまでついて三千元」

みどり「最高よ」

蛍子「夢みたい」

更羅「・・・相変わらずプチブルね」

三人「・・・えっ!？」

夏子「今、なんていったの？」

更羅「プチブル!っていったのよ」

更羅以外の三人不思議そうに顔を見合す。

更羅「プチブルっていうのはね、プロレタリアートを搾取する、ブルジ

ョワジーに憧れながらも実際にはなれない品のない小金持

ちのこと。要するに最低の人種」

蛍子「・・・へんなの」

夏子「遅れてきていきなり何いってんの」

みどり「おいしいもの食べるのが、なにがいけないっていうの」

夏子「いい年して、みっともない!そこらのフーテンみたいな恰好して。」

更羅「なんですって」

夏子「学園のシスターが今の更羅を見たら、なんておっしゃるかしたら。情けない」

更羅「やめてよ! シスターの話なんて」

夏子「どうしちゃったの? 更羅!」

立ち上って激しく睨みあう更羅と夏子。

更羅「わ、私は気がついたの。この一年半で」

夏子「何に?」

更羅「私たちがいかに欺瞞に満ちた間違った教育を受けてきたか」

夏子「間違った教育?」

更羅「社会や国家になにがあっても、関係なし。見て見ぬふりをき

めこむ。私たちの目指すのはいい結婚相手を見つけること。  
そして、いい家庭を作り、子供を育てる」

夏子「そのどこが間違ってるの」

みどり「一番価値のあることじゃない」

更羅「もう、あなたたちって！どうして自己の存在理由を追及しようとしなの？アイデンティティを」

夏子「アイデン？…ティティ？なにそれ？」

更羅「要するに自我との格闘よ」

夏子「えっ？」

更羅「そしてそのアイデンティティと社会との接点の究極に真の自己実現が存在する」

夏子「はあ!？」

更羅「社会で起きてること。ベトナム戦争はまだ終わってないのよ。  
今日もたくさんの方が殺されてる。アメリカ帝国主義のもと」

夏子「劇団で洗脳されちゃったんだ」

更羅「違うわよ!」

夏子「じゃ、なに？」

更羅「ま、国家の犬たる官僚志願者と結婚して、マイホーム主義にどっぷり浸かってる夏子には到底わからないだろうけど」

夏子「…な、なんですって!…失礼な」

更羅「もっと皆に気づいてほしいのよ。国家とか社会、そして自分についてもっと考えてほしいの。そりゃ、主婦として子供を育てたり、家事に色々工夫する事も必要かもしれない。でも一番大切なことは」

夏子「なによ!？」

更羅「自己認識。自己否定。そして自己実現」

みどり「はあ？」

更羅「それも追及しようとしなくて、周りからめくらにされて。そうやってその、ランチ?ちかなんとかを食べて喜んでる。御目出度いにもほどがあるわ」

夏子「いつから過激派になったのよ」

蛸子「そうよ。今日のために夏子がどんなに苦勞したか。お店の予約とったり、赤ちゃんだってお母さんにうんと叱られながら、預かってもらってやっとなんか…」

みどり「そんなに気にいらないのなら、最初から来なきゃいいじゃない」

更羅、急に座り込むと頭をかきむしる。

更羅「もう！・・・どうしてわからないのよー！」

いつのまにかべそもかいている。

夏子「あっ」(笑う)

蛍子「あれやってる」

みどり「なんかひさしぶりに見た」

夏子「すごいストレスの時必ずするやつ」

蛍子「そうそう」(笑う)

夏子「もう更羅！」

蛍子「なにがあったの？」

夏子「なんか最高につらい事があったのよね。知ってるわよ。いつもそうだった」

蛍子「子供のときからね」

夏子「素直に言えない。ほかのことにこじつけて因縁つけてくるの」

蛍子「十七年間、見慣れたパターン」

みどり「私たちはだませないわよ」

夏子「なにがあったの？言っちゃいなさい」

更羅、唇をかみ締めているが徐々に涙が。

更羅「・・・昨日ね・・・」

夏子「うん」

更羅「・・・劇団で選ばれて・・・」

夏子「うん」

更羅「映画のヒロインのオーディションを受けたの」

みどり「すごいじゃない！」

更羅「すごい才能のある新人監督で、日本のヌーヴルヴァーグを

背負うだろうっていわれている人」

夏子「・・・そ、それで？」

更羅「私ともうひとりの子が主演の候補」

蛍子「演劇部でも一番のスターだったものね」

更羅「前から憧れてた監督なの。日本の映画には今までになかった感性。候補に選ばれてから、どんなに思いこんできたと思う？」

絶対私が主役をやるって信じて」

蛍子「うん。それで？」

更羅「…お、落ちた…！」

夏子「えっ」

更羅「私どうしても演りたかった。でも面接の時、監督からすごい恐い顔で、脱いでもらいます。セックスシーンもかなりあります。覚悟はできてますね。大丈夫ですね。っていわれて」

夏子「それで!？」

更羅「一応『はい』って…。蚊のなくような声になっちゃって…。もう一人の子はもうやる気まんまんで『私はこの映画に賭けて

ます。命がけでとりくみます!』とかいっちゃって」

みどり「…それはしようがないかもね」

更羅「…自分が情けない…」

蛍子「でも現実的に無理よ」

夏子「落ちて良かったのよ」

更羅「ひどい!夏子」

夏子「じゃあ更羅、本当にそんな役できるの?」

三人に見つめられる。再び大声をあげて泣き出す。

みどり「次はきつと更羅にあつた役がくる」

蛍子「更羅には才能があるんだから」

みどり「自分を信じて頑張るのよ。更羅はすごい女優になる!」

更羅（泣きながら）「自分がただ悔しいのよ。その勇気のなさが」

夏子「勇気かしら?ご両親や周りのひとだってどんなに傷つくか。

その前に更羅が耐えられる筈がない。芸術芸術って偉そうにいうけどそれより大切な事がある。ま、でも。挑戦はしたんでしょ?それでいいじゃない」

更羅「劇団の子たちってすごいのよ。負けず嫌いで気が強くって。

私、この一年半、愚痴もこぼせないし、弱音もはかないで、劇団で修行してた。」

みどり「全国中から狭き門に集まってきた人たちだもの。そりゃ、そ  
うよ」

更羅「学園ではついぞ見たことないタイプ」

蛭子「私たち競争なんてしたことないもんね」

更羅「わたしがなにかやると『お嬢様はこれだから』って馬鹿にされる。悔しくて私も誰にも負けないってふりしてたんだけど、もう駄目。限界。」

ただ皆に会いたくてたまらなかったわ」

夏子「一年半も会わなかったなんて」

蛭子「初めてよね。こんなこと」

音楽 (you have got a friend)

みどり 六歳だった。はじめて会った教室

夏子 たった六歳の子供だった

更羅 わけもわからずに 着せられたセーラー服

みどり 教室で「名前の順番に並びなさい！」

蛭子 前から四人の私たち

夏子 これから何がおこるのか、怖くて怖くて

みどり 気がついたら、手をしっかりつないで

更羅 あの瞬間

夏子「友達？友情？なんだかそんなに簡単にはいえないもののように気がする」

みどり「とにかくどんな小さいことでも話しちゃう。報告しちゃう。秘密にできない」

夏子 はじめての生理 「ママより先に言った」

更羅 はじめてのデート

みどり はじめてのキス、はじめて私を男の人が触った時

「どんな順序だったか、どんな感じだったか。頭の中ではすでに皆に話し出していた。実況中継みたいだね」

夏子「誰にも言えないこと、むしろ、話さなきゃいられないの」

蛭子「その四人がよくぞ一年半も会わないで」

沙羅「寂しくて不安で気が狂いそう」

蛍子　　夏子は結婚、みどりは○「、沙羅は女優、私は…  
四人　　とにかく始まった！私たちの人生

照明、変化する。庭園の木が強調。

みどり「始まったわね…もう誰かのせいなんかには出来ないみたい。  
　　なんだか怖い」

蛍子「私も」

更羅「私も」

みどり「夏子は怖くないの？」

夏子「勿論怖いわよ」

更羅「あの六歳の心細い感じ」

蛍子「そうそう」

みどり「…でもさ、こうやって四人でいれば心強いわ」

夏子「…今日母にいわれたの。あなたたちがそうして仲良くして  
　　いられるのも今だけよ。人は変わっていくの。そのうち、旦那様  
　　や恋人ができたならそちらの方が大切になっていく。女友達なん  
　　てもろいものよ、だって」

みどり「あら失礼ね」

夏子「悔しくない？そんな言われかた」

蛍子「私達は絶対違うわ」

夏子「だから会い続けましょうよ。そうだ。こうしない？それぞれの

誕生日に会おうの」

沙羅「誕生日？」

夏子「そうすれば私は春。夏子は夏。蛍子は秋。更羅は冬。ここ  
　　の庭の季節の花も変わっていく」

蛍子「皆誕生日、いいわね。」

夏子「夜は難しいけど、お昼なら、ね？こうやってランチを食べまし  
　　ょうよ」

更羅「ランチ、か」

みどり「更羅もあーだこーだいってないで食べてごらんさいよ。も  
　　う　　腰がぬけるほどおいしいんだから」

更羅「本当？…じゃ、食べてみようかな」

夏子「これこれ。生うにのジュレよ」

更羅、一口食べる。

更羅「一口食べて」・・・なにこれ！おいしい！」  
夏子「でしょう」

更羅「落ちたショックも吹っ飛んじやいそう」  
蛍子「だから、いったじやない」

更羅「・・・それと、皆に会えたからね」

みどり「だから、これからも」

夏子「必ずよ」

更羅「うん、必ず」

四人、にっこりと微笑みあう。

風は桜の花びらと共に四人に吹き付ける。

そのままストップモーション。みどり以外退場

音楽・みどり、舞台前方で独白

MI「It's too late」

みどり「十三回目のお見合い。すごくうまくいったと思った。今まで  
になく私を受け入れてくれてる、って感じたのよ。そりや実

家が農家の人だから、話が全て合ったわけじゃないけど。国立の医学部の研修生。今はたいしたお給料もらえないけど、その間は実家で援助してもらえばいい。これでやっと私も医者のお奥さんになれる。

新居はどこにしよう。やっぱり病院の近く？新築マンションよね。絶対。7回建ての一番上とか。勤務医でしばらく我慢していずれば開業。もしその時この人に資金がなかったら、実家を出してもらえばいい。

絶対に今度はうまくいくと思ったのに。

また断られた！・・・信じられない。

ああ、何故夏子はなにもかもうまくいくの？ずるい。ずるい。ずるい！

夏子に勝ちたい。夏子よりいい人生を送ってみせる。

私が医者か弁護士と結婚が決まった時の、夏子の顔が見たい。それだけよ！」

## 第二場

スライド、または看板に文字。

「1986年（昭和61年）フレンチレストラン・ルポア」

夏。メイン・ダイニングのテーブルに座っているのは更羅。黒いパ  
ンツスーツ姿。サングラスをかけ、突っ伏して寝ている。

前場から十四年後、三十七歳になっている。と、蛍子が入っ  
てくる。今だに少女のような清らかさがある。

蛍子（気づいて）「・・・更羅！ 更羅じゃないの！」

更羅、目覚めて、はっとする。

更羅「：ごめん。すっかり寝ちゃった」

蛍子「更羅！更羅なのね」

更羅「・・・おけい・・・！」

蛍子「もうお一人がいらしてますっていうからてっきり夏子だと思っ  
たの。そしたら更羅なんて。信じられない。今日はお仕事は？」

更羅「札幌でロケだったの。今朝まで徹夜になっちゃって今日急に  
オフになったの。こんなチャンスないめったにないじゃない？ 飛

行機に飛び乗ってきたのよ」

蛍子「本当に？嬉しい！更羅に会えるなんて」

更羅「ごめん。すっかりご無沙汰して」

蛍子「あたりまえよ。忙しいんですもの」

更羅「まあね。自分でもへんな感じ。三十五すぎてこんな風になる  
なんて、夢にも思わなかったわ。テレビ番組のレギュラーなんて  
もうありえないって諦めてた矢先に」

蛍子「ドラマの小姑役が大当たりして」

更羅「人生ってわからないものよね」

蛍子「実際の更羅には会えないのに、テレビで毎日更羅を見る。  
すごく不思議。連続ドラマ。朝のモーニングショー。コマーシ  
ヤル。画面からニコニコ笑いかけてくる」

更羅「私自身だって信じられないわよ」

蛭子「でも鼻が高い。私の小さい時からの親友がテレビに出てる。映画にも出てる。日本中の誰もが知ってる有名人なんて。

ねえねえ。今日こそサイン頂戴ね。本当は近所の人からも何枚も頼まれてるの」

更羅「わたしたちの間でそんな事やめてよ」

蛭子「駄目？」

更羅「駄目ってことないけど……でもおけい、私は全然変わってなんかいないわ。自分でも不思議でしょうがない。まわりの世界ががらって変わっただけ」

蛭子「そうよね。そうよ！」

更羅「ずーっと続いてるんでしょ？ ランチ」

蛭子「そうよ。それしか楽しみがないもの。特に私はね。でもね、いろんなお店に行ったけど、やっぱりここが一番いい」

更羅「私も……ここ……大好き」

……この砂肝のコンフィとブランマンジェが食べたくて食べたくてまらなくなるのよ。仕事しながらも、いいなあ。皆今頃あそこでゆっくりお食事しながらおしゃべりしてるんだろ。夏子がまた大袈裟なことって皆が大笑いしてるんだろ。その声が聞こえてくるような気がする時が……」

蛭子「今日のメインは子羊だって」

更羅「キヤー」

蛭子「ヴィシソワーズも始まったわ。ホワイトアスパラガスも」

更羅「いいわよね、ここ。本当に」

蛭子「うん」

更羅「あっ。そうだ。聞きたいと思ってたの」

蛭子「なあに？」

更羅「お兄様の病気、はっきりわかったの？」

蛭子「うん」

更羅「……それって」

蛭子「筋ジストロフィー」

更羅「……やっぱり」

蛭子「そうなの……」

更羅「実はこの間、私のファンの医者と食事したの。その人、筋ジストロフィーの研究では日本で第一人者らしいわ」

蛭子「なんて方？」

更羅「○○大学の××教授」

蛭子「ほんと！？なかなかあの人には見てもらえないのよ。紹介状でもない限りね」

更羅「わかった。まかしといて」

蛭子「：ありがとう。ありがとう、更羅」

更羅「いいの。私にできることはこれくらいしかないから」

蛭子「更羅」

更羅「今は忙しくてなかなか来れないけど、ずっと続けててよね。ラ  
ンチ」

蛭子「勿論よ」

更羅「いつか、私も毎回来るから。絶対」

蛭子、はっと更羅を見つめる。その時、騒々しく  
夏子登場。

夏子「ごめん！遅くなっちゃった」

蛭子「夏子！」

夏子「ああ、暑くて死にそう。そのお水一杯もらっていい？」

コップの水を一気に飲む。

夏子「子供たちの夏季講習の申し込みにかけずりまわってたよ。  
高校受験に中学受験に小学校受験。みごとに重なったわ。夏  
季講習代だけで二百五十万！

でもここで手は絶対抜けない。夏を制するものは受験を制す。  
ああ、人生最大の大変な夏になりそう。(ふと更羅に気づく)え  
っ?」

ここにこしているが笑いだす更羅。

夏子「：：更羅？」

更羅「夏子！」

夏子「：：更羅！更羅なのね！」

二人、思わず抱き合う。

蛭子「札幌での撮影が急に中止になったんですって」

更羅「なんて運がいいんだろうって飛行機で飛んできたのよ」

夏子「更羅。会いたかったわ。めっちゃめっちゃ」

更羅「私だって」

夏子「よく来られたわね。ねえちょっと。すごいご活躍じゃない。」

更羅「お蔭さまで」

夏子「どのチャンネル回しても更羅が出てる時があるわよ」

更羅「また。大袈裟なんだから」

夏子「夢をかなえたんだ。更羅」

更羅「・・・うん。まあね。夏子も・・・」

夏子「・・・私?・・・どこが?」

更羅「すごいイキイキしてるわよ」

夏子「まさか。ぬかみそくさいただの主婦よ」

更羅「全然。やっぱり夏子は王道を行く人なのよ。あの学園のシスターの教えを忠実に守ってるのは夏子だけ。ひたすらに良き妻、良き母であれ」

夏子「そう言われれば子持ちは私だけか」

更羅「お子さん三人?」

夏子「十四歳女。十一歳男。六歳女。今年はトリプル受験てわけ」

更羅「すごい」

夏子「毎日毎日子供のマネージャーに忙殺されます!ここで美味しいもの食べて、おしゃべりするのが唯一のストレス解消」

更羅「ご主人も順調に出世?」

夏子「忙しいみたい。ほとんど寝に帰ってくるだけ。このごろ会話も全くなーし。でもそれが楽。子供の事で精一杯ですもの」

蛭子「とにかく座りましょうよ」

夏子「そうね。あれっ、みどりは?」

蛭子「でがけに電話があったの。なんか急に具合が悪くなったんだって。遅れても必ず行くようするから先にはじめてって」

夏子「えーっ、せっかく更羅が来てるのに」

更羅「みどり仕事で頑張ってるんだって?」

夏子「そうなのよ。本人はものすごく結婚願望強かったじゃない。

お見合いも何十回もしたし、恋愛も何回かあったんだけど、結局うまく結婚に結びつかなくて。

三十の誕生日の前日は、落ち込んで大変だったってわけ」  
蛭子「もう、自殺するって騒いで」

夏子「でも、みどりって意外に仕事があつてたのね。どんどんどんどん

出世しちゃって」

更羅「日経新聞に出てたわ。女性で初めて管理職登用って」

蛍子「男の部下が十人もいる部署の課長に大抜擢。本人はすごくいやがってるけどね。要するにバリバリのキャリア・ウーマン」

夏子「ほら、今年からできた男女雇用均等法。そのモデルケースみたい」

更羅「へえ。みどりがね」

蛍子「体が心配だわ。」

夏子「じゃあ、始めましょうか。食前酒をお願いします」

音楽・照明変化

ギャルソンがグラスをくばる。

三人「乾杯！」

蛍子「又会えた！」

更羅「・・・うん・・・」

夏子「あつたとたんにはすぐあの頃に戻れる」

蛍子「そうそう」

更羅「不思議よね」

皿がくぼられる。皆の目が輝いていく。

シェフの声「本日の前菜は、コンソメ ドウヴ アライユ 黒トリフと  
フォアグラでございます」

照明、変化。三人、頬がとろける表情。

更羅「ウーツ。夢にまで出てきたこの味」

夏子「お、おいしい！」

蛍子「本当！」

更羅「来てよかった！」

蛍子「でも更羅なんかすごいお店にじゃんじゃん行ってるんじゃないの？」

更羅「すごいお店って？」

蛍子「だから雑誌に出てる最先端みたいな」

更羅「そうね。一応誘われるけど」

蛭子「けど？」

更羅「ほとんど断っちゃう」

蛭子・夏子「えっ」

更羅「事務所はわがままもいいかげんにしろっていうんだけど」

夏子「ふうん」

更羅「相手はたいていスポンサーの企業の社長とか広告代理店の部長、時々は政治家とか。私の大嫌いな人種」

蛭子「いいじゃない。ただで素敵なレストランでおいしいものが食べられるんですよ」

更羅「おいしくないわよ。ここに比べたら」

夏子「タレントとご飯食べたらしらないの？」

更羅「行かない。全然話しがあわないもの」

夏子「えっ。じゃ、お食事とかどうしてるの？」

更羅「仕事で出るおいしくもないお弁当食べて。家ではカップラーメンとか」

蛭子「あんな華やかな世界にいるのに」

更羅「外に食べに行くのも面倒くさい。人に見られてまた何か言われるのかと」

夏子「お金だつて山ほどあるんですよ？」

更羅「まあね」

蛭子「お休みの日とかどうしてるの」

更羅「もちろん一日中、寝てるわよ」

夏子「なにそれ」

更羅「朝から晩まで、ベッドにいる。震えながら。心臓がすごい音でドキドキして自分の口を押えてそれに耐えるだけ。一日中」

蛭子「・・・更羅・・・」

夏子「・・・それって病気じゃない

お医者様とかちゃんといってるの？」

更羅「そんなんじゃないのよ」

夏子「じゃ、なんなの？」

更羅「自分でよくわかってる。怖い。怖いだけの。病気なんかじゃないわ。

ちゃんとわかってる」

夏子「なにが・・・。なにがそんなに怖いのか？」

更羅「今の・自分・」

更羅、急に頭をかきむしる。あっけにとられて見つめる二人。

更羅「今の私がたまらなく怖いのよ」

夏子「怖い？どういうこと？」

更羅「急になにもかもが変わったの。」

あの小姑役をやった時から」

蚩子「そりあそうよ」

更羅「あれから、皆が私を見てるの。」

じっと見てる。まるで、猿山の猿を見るように……皆、笑いながら」

夏子「超有名人だもん」

更羅「町を歩けば人ばかりができる。」

別に努力もしていないのにどんどん仕事に来る。なんでこの私に？っていう仕事はやまほど。インタビュアーではいつも同じ事を聞かれる。スケジュール表は何ヶ月も先までいっぱい。通帳には信じられない金額が」

夏子「素晴らしいじゃない」

更羅「それが、嫌なのよ！耐えられないの！」

夏子「どうして？」

更羅「私ずーっと下済みだった。十何年間も。その時誰も私を見てくれなかった。誰も私に気づいてもくれなかった。台詞が四つしかない舞台公演。ドラマのクリーニング屋の店員の役。来る日も来る日も」

蚩子「更羅」

更羅「でも私あの頃の方がずっと幸せだった」

夏子「どうしてそんな事いうの？」

更羅「あの頃よく思ってた。あの角を曲がれば。あの角さえ曲がれば。そこに一人の男の人が立ってるの、その人はテレビの名プロデューサーか有名な舞台の演出家がいうの。あなたのような女優が現れるのを待っていました。あなたこそ僕に必要なのですって」

蚩子「……更羅」

更羅「何度も……何度も思った。もう、捨ててしまおう。もう、諦めよう。今度こそ、もうやめよう。私には絶対無理……。」

でも私、どうしてもその夢を持ち続けてしまった。手放せなかった。中学の演劇部の時からもう……二十四年よ」

夏子「そして見事に夢がかなったんじゃない。生き馬の目を抜くあんな厳しい世界で。成功の確率はほんのひとにぎり。」

それを更羅は手にしたのよ」

更羅「…そこにあったもの。なんだと思う?」

夏子「えっ」

更羅「ひどい世界よ。下品。薄っぺら。嘘だらけ。真実なんてかけらもない。お金になるかならないかそれだけ。私はただの商品」

夏子「更羅」

更羅「皆傷ついてるわ。ここだけの話だけど麻薬とか乱れた男女関なんてあそこじゃごく当たり前。そうでもしなきゃ、とてもバランスとれない!。私もそう…耐えられない。…二十四年。あの角を曲がればって。そして、曲がってみたら…」

夏子「更羅」

更羅「私、どうすればいいの…どうすれば…」

シエフの声「子羊の網包み焼き、グリーンピースのムース添えでございます。ワインはシャトー・ド・クロットをご用意しました」

三人、ゆっくりと食べはじめる。

夏子「更羅」

更羅「なに?」

夏子「いつそのことやめたら?」

蚩子「夏子!」

夏子「すっぱりやめて、芸能界なんて引退して結婚するの。そして子供を産むのよ」

蚩子「夏子ったら」

更羅「その話?その話なら今はいいわ」

夏子「もう!あんなたちにはわからないの。子供のすばらしさ。子供こそ至上のもの。三人を生んで私つくづく思う」

蚩子「夏子」

夏子「生物の、最大の欲望は自分の遺伝子を残すことなのよ。私たちの様々な行動は、潜在的にその欲望に突き動かされているのよ。それなのに、皆、その本能から目をそむけてる…。知ってほしいのよ。子供ほど価値があり確かなものはないのよ。なに

をやったって、いずれは終わっていく。命も夢も。いずれは。でも、子供だけは違うのよ。それは未来につながっていくのよ。三人の子を持って、つくづく思うの。なんて幸せで意義のあることなんだろうって。確信もつていえる。子供を生むことに勝る行為はないわ。私たちは子供が生めるのよ。人間の最高の行為なのよ」

更羅（叫ぶ）「もうやめて！もう三十七なのよ」

夏子「もう今どれだけ医学が発達してると思ってるの。でもまあギリギリではあるわね。更羅、今つきあってる人いるの？」

更羅「いない」

夏子「あの照明家は？」

更羅「去年別れちゃった」

夏子「その前に長く一緒にいた人いたじゃない。劇団の役者さんだっけ？」

更羅「あの人もう結婚しちゃったわ」

夏子「そう。じゃ、別に正式に結婚しなくたってかまわないわ。とにかく子供だけ提供してもらって、子供を産むのよ」

蛭子「夏子！」

夏子「更羅ならいくらでも可能なのよ。経済力はあるんだから」

蛭子「いいかげんにしなさいよ。夏子」

夏子「だってもう時間がないのよ。更羅は芸能界で大成功しても、のすごい満足してると思ってたの。でも、そうじゃないとしたら」

蛭子「乱暴すぎるわよ。夏子はいいつも」

夏子「おけい。いい機会だから、おけいにも言うておく」

蛭子「なにを？」

夏子「お兄様が大変なのはわかるけど、もうここらへんでおけいはおけいの人生を考えるべきよ……病気がやっとはっきりしたんでしょ？残酷な言い方だけど、お兄様はもうよくなならない。悪くなつて

いくだけなのよ」

更羅「夏子！やめて」

夏子「あえていうの。親友として。これ以上よくならないお兄様を

自分の人生を犠牲にしておけいが看病する意味があるの？それを本当にお兄様が望んでの？……あなたには母親がないから私という。

看護婦さんを雇ってもらいなさいよ。そしておけいは……。主人の後輩に素晴らしい人がいるのよ。年はひとつ下だけど、

仕事仕事で婚期を逃して。前から、おけいにびったりだなんて思ってたのよ。セツティングするから是非会ってみて。」

更羅「(笑う)。夏子にかかったら、皆子供を生まされるのね」

夏子「だって女はその為に生きているのよ。男には逆立ちしたってできないことじゃない。私たち女は母親になるために生まれてきたのよ。次の世代を生み、育み、育てあげる。」

女の自立？男女雇用均等法？ちゃんちゃらおかしいわ。男も女も次の世代を産んで育てるために生きているのよ。その為の分業よ。男は社会で仕事。女は家庭を守る。全く平等だわ。くだらない世の中の風潮で皆自分の人生を見誤ってる。私の大切な友達にはそうなってほしくないのよ」

更羅・蛍子「……」

夏子「更羅、あなたはもう自由をとことん満喫したのよ。」

普通の人が入ることの出来ない世界に入って、味わいつくして失望したんでしょ？ あとは責任を果たすのよ」

更羅「子供を産むことが責任なの？」

夏子「そう思う」

更羅「……責任？」

夏子「自由と責任。その両方を得なければ、私たちは幸せにはなれない」

更羅、蛍子、うちのめされたように耳をふさいでしまう。

と、ドアが開き、みどりが入ってくる。

知的な着こなし。しかしその顔色は悪い。

みどり「ごめんね。遅くなっちゃった。あー喉が渴いた。

(更羅を認めて)えっ。更羅！更羅が来てるの？きゃー！どうしたの？今日仕事は？」

更羅「休みがとれたの」

みどり「う、うれしい！更羅に会えたなんて！」

更羅「キャリア・ウーマンになったのね。新聞見たわよ。みどり」

みどり「更羅こそ、すごいじゃない。仕事でもね、更羅の同級生でいうことで契約がとれたりすることもあるの」

夏子「とりあえずワイン一杯頂いたら」

みどり「今日はやめとくわ」

蛍子「具合悪いって、もう大丈夫なの？」  
夏子「そういえば顔色悪い」

みどり庭の百日紅の木に抱きつく。

みどり「今お医者さまいってきたの。ここはいいわよね。ああ、気持ちいい」

三人、みどりを凝視する。

みどり「今日更羅が来てて良かった！ 報告があります！……妊  
娠してるの。もう六週めにはいってるって」

夏子「……えっ！……相手は誰なの？」

みどり「よくわかんないの」

蛍子「わからないって」

みどり「ホストクラブとか散々行ってたの」

夏子「みどりったら！」

みどり「でも、多分あの人だわ。取引先の小さな工務店の社長」

夏子「その人って」

みどり「勿論家庭もちよ」

夏子「じゃ、どうするのよ？」

みどり「産むわよ。最後のチャンスだもん」

三人驚きでみどりを見つめている。

そのままストップモーション。暗転。

蛍子ひとり残り、観客にむかって語りだす。

蛍子「時々道に迷ってしまったような感じがします。

……深い深い森の中。ここはどこなんだろう。

私の歩いていく先は一体どこへ通じていくんだろうって。

私は三十七歳です。もうばあです。電車の中や喫茶店にいる

私を、若い人たちは軽蔑しているんでしょう。

あの女はばあだ。何の価値もないばあだって。

そのとおりだわ。

それに私ただのばあじゃないんです。

皆が当たり前のように経験することを何ひとつしていません。

男の人とデートもしたこともないし、キスもしたこともないし、勿論セックスもしたこともありませぬ。結婚もしてないし、子供も産んでないし、能力のあるキャリア・ウーマンでもありません。ないないづくしの人生。

まあ、こうなるには色々私なりの事情があったんですけど。

そうだわ。

一回だけ。

一回だけドキドキするような。

胸がときめくような事があったわ。

……痴漢にあったんです。

兄の薬を取りにくくために、ラッシュの電車に乗りました。

あんなに混んでる電車にのったのは生まれて初めてです。

――身動きもできないまま、ドアの近くに立っていました。

すると誰かの指が私のスカートの下から入ってきたんです。

びっくりして声を出そうと思ったけど、恥ずかしいから黙っていました。

すると今度はその指は私の下着の中まではいってきました。

そこにある私自身をその指はゆっくりゆっくりなでています。

見上げると結構ハンサムなサラリーマンでした。知らん顔して別のほうをみていましたが、耳が真っ赤になっていたので、すぐわかりました。

その人が触り続ける間、私は抵抗もせず、されるままになっていました。

不思議な感じでした。

その人の触っている私の部分は、私でありながら、なにか別のわたしのようでした。

明らかに本来の私とは別の主張をしていました。

いかなれば、私をはじめて会った私。

今までの私が知らなかった強烈な私自身。

すごい衝撃的な発見だった。

セックスを体験した人は、皆こんな体験をしているのでしょうか？もしかしたら、性的な快感などより、その発見の方にこそ驚きと喜びがあるんじゃないでしょうか？

まあ、何も知らない私には、偉そうなこという資格はありませんが。

ひよっとしたら、遅れた頭の悪い女って言われるかもしれないけど、人間ってこういうものなんです。

その人は結構長くそうしていました。

なんだか嬉しかったんです。

：私に興味を持ち、私を触ってくれる人がいる。

終点の駅につくと、その人は降りていきました。

降りる時、ちらっとだけ私の顔を見ていきました。

こんな女もいるんです。

でも私には友達はいません。

小学校一年から三十年も続く仲良し四人組。

三ヶ月に一度は会って、ランチをたべます。

最高に楽しいわ」

### 第三場

2001年（平成13年）フレンチレストラン・ルポア）

みどり登場。ぞんざいな安手のスーパーで買ったような服装。五十三歳。荒い息であたりをゆっくりと見渡す。誰もいないのを見てほっとしたように椅子に倒れこむ。疲れ切った深いため息をつく。ふと、庭の木をじっと見つめるみどり。誘い込まれるように歩いていく。最初はおずおずとやがて手をまわしてしっかりと木を抱きしめる。目から涙が流れおちる。と携帯の着信音。携帯を出し、電話に出ようとするがまだ操作に慣れていない。あちこちのボタンを押しようやうに出る。

みどり「も、もしもし！あ、夏子。遅れるの？うん、うん。

警察？病院？たいへんじゃない。無理しなくていいよ。適当にはじめてるから。。。気をつけてね」

蛭子が登場する。

蛭子「みどり！」

みどり「おけい！」

蛭子「どうしてたの！？会いたかったわ。元気だったのね」

みどり「お蔭さまでなんとか。生きてるわ」

蛭子「連絡とれない時期があったじゃない。もうどんなに心配したか」

みどり「ありがとう・・・」

蛭子「でもまた会えた。本当に良かった・・・それで、今は？」

みどり「やっと落ち着いたわ。部屋を借りて、親戚に預けてた娘も引き取って。また一から出直し」

蛭子「そう・・・良かった。バブル崩壊から十年？世の中すごい勢いで変わったものね」

みどり「本当よ」

蛭子「特に女がね」

みどり「ウーマン・リブって言葉を初めてきいたのっていつだったっけ。

フェミニズム、女の自立、バリキャリ、勝ち犬とか負け犬とか。

そんな言葉を聞きたびにもものすごく動揺する自分がいた。自分さえ信じていればよかったのに。ほんとうに馬鹿。

でも社会の根っこはそんなに変わっていないのにね。

私、あのころ新聞や雑誌に出たりしたじゃない？？女性管理職って時代の先端いってるような、へんな錯覚しちゃったのね・・・せっかく部下を三十人まで持つようになったのに会社辞めて事業おこしたり。

いざとなったら、実家にたよればいいっていう甘い考え。うまいくくわけないわよね。その実家も、不動産投資で失敗して一家離散。」

蛭子「私を見てよ。その長い長い時間、ただ家にいて兄の介護をしてただけ」

二人、見つめあう。

みどり「今ね、私回転寿司やでアルバイトしてるの。時間がくると店の外に出て大声でお客さんをよびこむの。『タイムサービスでえす。いまなら今朝三浦半島でとれた中トロがたったの90

円でえす！』一流女子大卒が泣いている。キャリアなんてなんの役にも立たなかった。」

蛭子「そうなの？」

みどり「でも夏子がね、すごい助けてくれたの。お金の事。

それも自分から言ってきたよ。持つべきものは友達、  
って……本当なのね」

蛭子「夏子はそういう人よ」

みどり「私ね、実は夏子のこと憎んでたのよ」

蛭子「えっ」

みどり「憎んでたっていうよりひがんでたのかな。悔しくて悔しくて。

絶対いつか見返してやろうって」

蛭子「みどり」

みどり「だって夏子は私が欲しいと思ってるもの、いつも先に手に入  
れちゃうのよ。別に努力もせずにも簡単に。失恋の経験  
もなく処女で結婚。何万人に一人くらいの超エリート。優  
秀な三人の子供に孫。都心の大きな家。……絶対私より先に+

蛭子「うん」

みどり「死ぬほど羨ましかった」

蛭子「うん」

みどり「死ぬほど」

蛭子「私もよ」

みどり「えっ……」

蛭子「当たり前じゃない。あんな人の側にいたら」

みどり「そうなの？ 私おけいはそんな事超越してるのかと思ってた」

蛭子「みどりの事だって私は羨ましい。可愛い可愛い子供がいる  
じゃない」

みどり「おけい……」

蛭子「ひとと長くつきあっていく事って苦しくて残酷なことなんだわ。

私何度も何度ももうランチにくるのやめようって思ったわ」

みどり「えっ……そうだったの……？」

蛭子「なにげなくいわれた一言が心につきさって血があふれ出

す……。眠れなくて朝まで考えて、何度も何度もはいて……」

みどり「おけい」

蛭子「もう二度とくるまいと思うのに、でも不思議……」

ランチの日 になるとなぜか来てしまう。苦しいだけってわか  
ってるのに、やっぱり皆の事が心配っていうか、気になるってい

うか」

長い間

みどり「・・・夏子、遅れるって。さっき携帯に電話があったわ」

蛍子「えっ。それで今日来れるって?」

みどり「うん。遅くなっても絶対行くから必ず待っていてくれって」

蛍子「そう・・・良かった・・・」

みどり「そうだ。更羅は今日来るの? そういえば、更羅って芸能界やめて、何してるの?」

蛍子「あのね、更羅はね・・・」

その時更羅が入ってくる。

素顔で紺の着物をきている。

みどり「更羅!」

更羅「ひさしぶり!」

みどり「更羅・・・」

本当にひさしぶりね。本当に」

みどり、感極まったように号泣する。

蛍子「みどり・・・」

みどり「もう、私、皆に会うことなんて出来ないと思ってたから・・・」

更羅「色々あったってわけよね」

みどり「そう」

更羅「みどりの顔見ればすぐわかるわ」

みどり「えっ、老けたってこと? ひ、ひどい」

更羅「そりゃ勿論老けるわよ。だってもう五十過ぎたんですもの。

色んな変化を受け止めたんだもん。皺もシミも成長の証。勲章

よ。アンチエイジングなんて馬鹿げてる」

みどり「えーっ! そうかしら?」

更羅「そうよ・・・」。

私たち、思えばおとぎ話みたいに都合よい夢をみてたわね。かなうわけもないわわ。あっちこっちにボコボコ大きな穴があいているのもしらないで。その穴にまっさかさまに落っこちて色々教えてもらったわ。この頃じゃ、それも悪くもないのになって・・・」

みどり「すごい。悟りを開いたの?」

更羅「まさか、どこが？なんか夏子も大変なんだって。？」

更羅「とにかく座りましょうよ。今日は気合はいつてるの。昨日の夕飯は軽めにして朝も食べないで、楽しみにしてたんだから」

みどり「なんか更羅……」

蛭子「うん」

更羅「えっ？」

みどり「すごいいい感じになってる」

蛭子「本当」

更羅「ありがとう。私、やっと終わったのよ。」

蛭子「終わったって？」

更羅「生理が終わった！万歳！！もうこれで夏子に、子供産め、

子供産めって責められなくいいと思うと本当にさっぱりして」

みどり「あの人の言葉って呪いよね。すごいプレッシャー」

蛭子「もしかして、それで産んだの？」

みどり「まさか……。でも、もしかしたらそうかも」

三人、笑う。

更羅「そんなこといいから。とにかく食べようよ。もうお腹ペコペコ。  
(大声)今日のコースは、アミューズ・ギユールは牡蠣の冷製……老眼鏡がいるわ。」

三人爆笑する。音楽

シェフの声「アミューズ・ギユールは牡蠣の冷製。温かいオマール海老のテリーヌ、ソースコラリーヌ。海の幸を添えたブロッコリーのポタージュ。天然鯛のポワレ。  
チョコレートムースとブルーベリータルトのデザートとなっております」

シェフの声の間にギャルソンがワインを手渡す。三人(ワインを合わせて)「カンパイ！」同時にグイッと飲み干す。

三人「お代わり！」

更羅「ああ、体に血が通いだす」

みどり「本当」

蛭子「おいしい」

みどり「本当」

更羅「私このランチに備えて食事抜いたりしたじゃない？そのせいかどうか知らないけど、ここに来る前にもすごく頭がいたくなつたのよ。あんな痛さ生まれてはじめて経験したわ。空腹で頭痛。聞いたことある？」

蛭子「ないわよ」

みどり「別の病気なんじゃない？」

更羅「一瞬そう思ったの。でもロキソニン飲んだらきれいに治っちゃった」

みどり「じゃやっぱりお腹すきすぎたから？」

更羅「食べるのだけが楽しみなのに、それをたたれて脳が反応したとか」

蛭子「それがこうじて特殊体質に」

三人、大笑い。

更羅「その時、その時、いろんな欲望があって、それに邁進して、生きてきたけど。この年になるまで残るものってそんなにはないわよね」

蛭子「おいしいものを食べること。昔からの友達と気兼ねなく話すこと……」

みどり「至福の時よ」

更羅「……私は、もうひとつ……」

みどり「えっ。なあに？」

更羅「演じるの」

みどり「えっ！やめたんじゃないんだ」

更羅「芸能界はきっぱりやめたわよ。」

あんなマネーゲームにはとてもついていけない」  
みどり「もったいないじゃない。誰もが手にできる成功じゃないのに」

更羅「皆がそういつてくれるんだけど、駄目なものは駄目なのよ。ちよっと気を抜くと、もう終わり。仕事が減ってきたなと思ったら、

あつという間にこなくなる」

みどり「そういうものなの？」

更羅「そうよ」

蛭子「それで？」

更羅「うん。家でのおんぶりしてたら、急に区役所の福祉課の人が訪ねてきて、もし良かったらやってくれませんか、って」

みどり「なにになに」

更羅「廃校になった学校借りて、寺子屋みた

いな演劇学校やってるの。今ってすごい時代なのね。いつのまに

かこんな事になったの？

蛭子「・・・そうね・・・。嫌な世の中」

更羅「学校に行けない子、部屋に引き込もちやってる子、ゲーム中毒の子。

家庭が崩壊して居場所のない子。痛々しい子供たち。」

みどり「私たちの若い時とは全然違うもの。世の中のずれやひずみで、大人だって傷だらけよ。私だってそうよ」

更羅「まず大声を出すことからはじめの。体を動かしてなにかになつてみる。少し慣れてきたら二人一組のエチュード。

シェークスピアやチェーホフの戯曲をテキストにして。五百年生き残ってきた言葉を自分の声で言ってみる。すごい難しい筈なのになにか自然にわかるみたい。人間なんて昔からたいして変わっていないんだって、すごく安心するみたい。勿論途中で来なくなっちゃう子もたくさんいるわよ。いいかげんな子や物を盗む子もいる。でも変わっていく子供もいるわ。目に光がともってくるの。

(自信に溢れた更羅の顔)えっ何？」

みどり「・・・それでか」

蛭子「子供の時からずっと知ってるけど、今の更羅が一番素敵よ」

みどり「本当！」

更羅「なにいつてるよ。照れるじゃないのよ。この海老のテリーヌ最

高よ」

と、夏子登場。別人の様。強烈なオーラは消え失せ不安と絶望の表情。

更羅「夏子」  
みどり「夏子」  
蛭子「夏子」  
夏子「…ひさしづり」

よろよろと近づく夏子を、三人で支える。

更羅「さ、座って」  
みどり「大丈夫？」  
蛭子「とにかく飲んで」  
夏子（グラスを少し見つけてから一気に飲む）「精神安定剤や睡眠薬もじゃんじゃん飲んでるんだけど大丈夫かな」  
みどり「平気よ。ワインくらい」  
夏子「更羅、ひさしづり」  
更羅「…本当」  
夏子（ふと庭を見て）「いい香り、金木犀…？」

夏子「なんていい香り」  
みどり「そうね」  
夏子「なんか不思議だな。私はこんなに色々あったのに。そんなこと関係なく時期がくれば毎年同じように花は咲いて…」  
更羅「そうよ。別に夏子が中心で世界が回っているわけじゃないのよ」

夏子「…そうよね…（自嘲笑い）本当私って勝手な人間」  
更羅「何かあったの？夏子。いいたくなければいわなくてもいい。でも話したいからここに来たのよね」  
夏子「…そうね。その通りだわ。」

しばらくの間。

夏子「…あのね…」  
三人「うん」  
夏子「…あのね…まどかが子供に手をかけたの」  
蛭子「…えっ。今なんていったの？」  
夏子「…だから、まどかが子供を」

三人、顔を見合わす。

夏子「3日前、なんかへんな予感がしてまどかの家に行ったのよ。鍵がかかっている、しんとしてただの留守の家。でも取り払えないような大きな予感がして、裏にまわって浴室のガラスを割って中にはいったの。家中、必死で見えて歩いてたら、案の定よ。ベツドルームに陽太がいて、首にはしめられたような青い痣があった、なんだか息もしてないみたいで」

三人「う、嘘でしょ!」

夏子「必死で人口呼吸して救急車も呼んで、まどかは車でどっかにでかけちゃって」

更羅「それで陽太ちゃんは!?!」

夏子「奇蹟的に一命はとりとめたの。でも障害はのこるかもしれないって…まどかは逮捕されて、マスコミも来ちゃって、明日の新聞に大きく出るって。財務官僚の娘が虐待の殺人未遂。夫は事実そのものより、その事でのすごいパニックになっている」

みどり「どうして、そんなことに」

夏子「生まれて一か月から通えるリトミック教室っていうのに通っていたのよ。ちょっとした体操やスイミングを教えてくださいる所なんだけど、そこで陽太は 他の子よりものすごく遅れてて、まどかはノイローゼみたいになってたんだって」

更羅「…な、なにそれ?」

夏子「出産してからずっと、あの子はずっとへんだった」

みどり「例の?…マタニティーブルー?」

夏子「…そうだって。なんなの、その病気。いつから、そんな病気ができたの?今出産した人の25%になるんだって」

蛍子「今はなんでも病気にしちゃうのね」

夏子「子供が生まれて、人生最高の幸せと達成感を感じてる筈の時期になぜそんなめんどくさい病気になるなきゃいけないの!?!」

…まどかが一歳くらいの時だった。テレビのドキュメンタリーでアメリカの幼児虐待の事やってたわ。私はそれを見て本当に驚いた。なんてひどい国なんだろうって。よくいうじゃない。アメリカで起きる事は10年後に日本でもおこるって。でも私これだけは日本で起きないって思ったわ。日本人は絶対そんな事しないっ

て」

更羅「夏子」

夏子「でもまどかは本当は子供なんて生みたくなかったんだって。アメリカに留学してたあの子はMBAと弁護士資格が取りたかったんだって。その方が結婚や子供よりずっとずっと大事だったんだって！」

みどり「……馬鹿げた世の中なのよ」

夏子「私のせいなのよね」

更羅「違うわよ、夏子」

夏子「ううん、私のせい。私のせいなのよ！」

蛍子「夏子」

夏子「……わからない。わからない。わからない。私はただ一生懸命やっただけ。ただそれだけ」

みどり「そうよ、皆知ってるわ。夏子は完璧に頑張ってた」

夏子「私はどこを間違ったの？ 私の何がいけなかったの？」

更羅「夏子」

夏子「……世間や親は小さい頃から私にいつもいつもいつも年頃になったら、いい相手と結婚して子供を産んで立派に育て、ちょっとやそとの不満などでは離婚などせず、親の面倒も進んでみる。老後は夫といたわりあって過ごす。それが一番いい生き方だと。私も全く疑いなんてしなかった。

……結末はこの様よ。笑えると思わない？ ものすごい錯覚。ものすごい妄想。私の子供は、自分の子供を殺そうとした……」

夏子、膝をついて倒れる。

更羅「皆そうよ。皆間違えちゃう。気がつくといつのまにかボコボコあいた穴にはまってる」

夏子「そうなの？ 私だけじゃないの？」

更羅「そうよ」

夏子「更羅……。皆にも……。私偉そうに言ったよね。絶対子供を産むべきだって。

自由も責任も子供を産まなきゃ、手に入らないって。……なんて、ことを……。そんなに甘くなかった。そんなに……

わたしは？・・・私はどうすればいいの！

号泣する夏子。更羅、夏子を抱きしめる。

しばらくの間。

更羅「・・・もういいのよ」

夏子「・・・いいって・・・？」

更羅「いいの」

更羅「(叫ぶ)すみませーん！メインのお料理お願いします。ワインももう二本」

夏子「えっ」

更羅「食べましょうよ、美味しいものを」

みどり「食べましょう」

蛭子「そうよ、食べましょうよ」

みどり「ランチを」

夏子「ランチ・・・」

更羅「おいしいランチを」

更羅、表情が変化してくる。

更羅「あら、へんだわ。

また頭が痛くなってきた」

みどり「だ、大丈夫？」

蛭子「顔色が変わってるわよ」

更羅「痛い！ 痛い！」

夏子「早く救急車呼んで！」

更羅、うずくまって、頭をおさえる。

やがて 転がって苦しみます。

駆け寄る三人。

三人「更羅！」

ストップモーション。暗転。

夏子「更羅、更羅、しっかりして！」

第四場 スライドにニュース映像が映る。笑顔の更羅の写真にテロップ。

「女優、川上更羅は10月15クモ膜下出血にて急逝。前々日の10月2日、小学校時代からの友人三人と会食中、突然の発作に襲われ、救急搬送されたが、昏睡状態のまま死亡。享年53歳」

更羅、現れてじっとそれを眺める。

更羅「どうして、こんな終わりかたなの？」

すっごい不思議。皆ともっともったいたかったのに。夏子。私、とうとう自由も責任も手にできなかったわ。でももうどうでもいいのよ。欲望なんてきりがないもの。

蛍子、みどり。先に逝くものとしてひとつだけ忠告します。

生きるって、記憶なんです。

記憶、記憶、記憶の集合体。

それがいいとか、悪いとか、価値があるとか、ないとか、そんなこと関係ないの。

今を生きて記憶を刻んでいく。

ただそれが全てなの。それが人生。

死んでみて、やっとそれがわかりました。

仕事。結婚。子供。セックス。お金。学歴。

素晴らしく充実したと思った時間。

いやになるほど空虚だと思った時間。

全く同じ時間でした。

特にたいした意味はありません、でした。

ま、できうれば、もう一回食べたいです。

ル・ポアの砂肝のコンフィと・・・舌でとろけた、あのブランマンジェ」

## 5 シェフの声

「まるで昨日のように、はっきりと覚えていきます。はじめてのコース料理に驚かれたあの顔・・・ワインを口に頬を紅潮させた

顔・・・デザートでのデコレーションにあがった歓声・・・はじけるような生命の力。なんと美しかった事か。

それは・・・もう・・・そう・・・48年前・・・。

その間世の中は恐ろしいほど目まぐるしく変化しました。食の世界の流行も知らず、なびかず、この店の厨房でひたすら同じ料理を作り続ける私。そしてあのお客様たちも3か月に一回、庭の花が変わる頃には必ずいらして下さいました。たくさんのお客様との出会いがありました。却ってきた食器を見れば、私たち料理人にはすぐわかるのです。どんなに私の料理をいつくしんで大切に食べてくださったかー

先日またあの方たちがきて下さいました。最後のランチです。

そう、思えば私とあのお客様たちは今まで一度も顔を会わした事も、言葉を交わした事もないのです

・・・でも私達は強く強く結びつきました。・・・48年・・・本当に本当に有難うございました

## 6 スライドに文字が映る。

「2020年令和2年フレンチレストランルポア」

夏子、みどり、蛭子。空いた椅子には、更羅の遺影。前場から17年が経過して三人とも七十歳の古希を迎えている。

夏子「生ウニのコンソメゼリーって、こうやってスプーンでウニをこそげとってたべるのよ」

みどり「絶句」

蛭子「おいしすぎる」

夏子「更羅にも食べさせたかった・・・」

みどり「もう、十七回忌か」

蛭子「十七年・・・途方もない歳月の筈が」

夏子「びっくりするほど、早く過ぎていったね。まるで飛ぶように」

みどり「そして私達は古希、70よー!」

夏子「・・・信じられない」

蛭子「本当に」

みどり「結局いつもこうなっちゃう。お悔やみとお祝い事が一緒になっちゃうの」

蛭子「なんかやっぱり、心苦しい」

夏子「だって皆めちやくちや忙しいじゃない。

三人の予定合わせるの、どんなに大変だと思ってるのよ」

蛍子「そうね」

みどり「新婚だもんね。忙しいわよね」

蛍子「うん」

みどり「やだ。おけい、照れてる。古希のばあさんが恥じらってる。うう、気持ち悪い」

蛍子「照れてなんかいないわ。ただ、少し笑っただけでしょ？」

みどり「それで、どうなの？新婚生活は？」

蛍子「ごく普通じゃない？」

みどり「ごく普通のわけないでしょ。67の女と49の男が初めて

結婚したんでしょ。それもほとんど恋愛経験もないふたりよ。

どこが普通なのよ」

蛍子「そうでしょ？そう思うでしょ？私もこんな異常なことしていいのかわかってははじめは思ったの。この年で22歳も年下の人と結婚するなんて。彼の熱烈なプロポーズも何度も断ったの。そんな人の好奇心の対象になるような行動は私は絶対とれませんか」

みどり「うん」

蛍子「でもね、考えてみたら。父と兄はなくなって、家族は誰もいない。私が若い頃お見合い写真とか持ってきて、やいのやいのうるさかった親戚のおばさんやおじさんも、皆鬼籍に入ってるか呆けちゃってほとんど存在してない。ご近所とも今や全然付き合いなし私、もう別に誰に遠慮することないんだって気がついたの。

ま、みどりと夏子には色々いわれるだろうとは思ってたけど」

みどり「ふうん」

蛍子「そりゃあ人とは違い過ぎるとはわかっていたけど。でも全然。普通よ。普通の結婚生活。多分、若い時にする結婚とそんなに違わないと思う。それにね、まわりを見渡すと、こういう結婚もないわけじゃないのよね」

夏子「本当。増えてる。そこらにゴロゴロいる。これも高齢化社会のせいなの？」

みどり「そういわわれれば、おけいだってとても古希になんて見えなもんね。今だに少女みたい。」

蛍子「私、もしかしたら、すごく長生きするのかな。だからこんな年

で結婚するはめになったんじゃないかしら」  
みどり「もう、なんでもありね。今の世の中。

こんなに寿命がのびちゃってさあ。年相応なんて、もうないの  
ね。私ももしかしてこれから出会いがあったりして」

蛍子「そうよ、頑張ってみたら」

みどり「冗談でしょ。もうごりごり。ねえ、夏子はどなの?」

夏子「勿論……うふふ」

みどり「えっ!……そう、そうなの?」

夏子「陽太の送り迎えやりハビリが忙しいから会うのはごくたまだ  
けど。」

みどり「ど、どこで知り合ったの?」

夏子「ネットよ」

二人、顔を見合わず。

みどり「ネット?」

蛍子「それって出会い系ってこと?」

夏子「だから、そうだってば」

二人「……」

蛍子「……あの事件の時、ご主人と離婚してから、会ってない  
の?」

夏子「全然。退職金は勿論半分もらったけどね。あの人、再婚し  
た らしいわよ」

みどり「……へえ…… あんなに真面目で模範的なセレブ奥様が」

夏子「仕方ないわよ。運命がそうさせたの」

みどり「……そうね。私もまさか七十にして、回転寿司チェーンの副  
社長になるなんて夢にも思わなかったわ」

蛍子「えっ。副社長になったの?すごいじゃない。なんで教えてくれ  
なかったの」

みどり「自慢するほどの事でもないし。やっぱり働くのって生き甲斐  
かも」

更羅が登場する。三人から離れた場所にある椅子に静かに  
坐る。微笑みを浮かべながら三人の話を聞いている。

夏子「でもさ、こんな七十歳想像してた?」

みどり「まさか」

蛭子「全然」

夏子「若い頃七十歳の自分てどんな感じだと思ってた

みどり「考えた事もなかった」

蛭子「もう死んでると思ってた」

夏子「だって生きてるじゃない！」

みどり「まあそうだけど・・・70歳か」

蛭子「サザエさんのフネさんみたいな感じ？もう少し高級感があってもいいかな」

夏子「子供や孫に囲まれて可愛いおばあさん」

みどり「見事に無くなったわね。お手本が」

夏子「子供時代、娘時代、死ぬまで誰かの奥さん。別に仕事なんて興味もなかったし」

蛭子「国の都合で労働力が足りないから、急に女も年寄りも働けっていわれてもねえ」

みどり「まさかこんなに変わってしまうとは」

蛭子「少しずつ少しずつ変わっていくのね。最初はえっという位の変化なのよ。それが何年もたつとまるで別世界みたいに変わってる。もう絶対抗うことができない」

夏子「でも不思議よね。なんで皆かたくなに同じイメージ持ってたんだろう。人は一人一人ものすごく違うのに」

みどり「ちゃんと考えるのが怖かったのよ。すりこまれた幸せのイメージだけ追っていけば、楽じゃない」

夏子「一人一人が、違っててそれぞれに生きてそれぞれに責任とっていくなんて思いもしなかった」

蛭子「・・・でも・・・すっごく難しいことよね」

夏子「・・・やっと・・・少しだけ・・・わかった・・・」

しばらくの間。

みどり「でも、とうとう、最後ね」

蛭子「・・・うん」

夏子「こんなに続いてきた老舗が」

蛭子「ついに力尽きるのか・・・なんだか、住んできた街も・国も全然違うものになってしまったみたい」

みどり「更羅と同じように消えてしまうのかしら」

夏子「・・・48年間、私達とずっと一緒にいてくれたのに」

三人、自然に手をとって抱き合い泣く。  
更羅、三人に近づきそっと手を添える。

シェフの声「そろそろデザートに致します。 なにかご希望はございますか？」

みどり「何にする？」

夏子「決まっているじゃない」

蛍子「そうよね」

みどり「うん」

夏子「更羅が大好きだったブランマンジェよ」

桜の花びらがまってくる。その中の四人がほほ笑む。

音楽、四人は魂の叫びを歌にする。(曲目未定)

幕